

フォークナー『サートリス』論

—彷徨より定着への経緯を中心に—

On Faulkner's "Sartoris"

—The Writer's Long Journey to Settlement from Mental Wandering.

花 本 金 吾

I

一九二九年発表の第三作『サートリス』(*Sartoris*)が、フォークナーにそれ迄の精神的彷徨を抜け出させ、以後長い年月をかけての人間追求の仕事という生涯の主題に定着させる上で、ひじょうに重要な作品であるのは、今さらここで繰返すまでもない。

いうまでもなく、フォークナーは、この作品に至るまでに、散文の作品としては『兵士の報酬』(*Soldiers' Pay*, 1926)と『蚊』(*Mosquitoes*, 1927)とを書いた。前者で当時流行のロスト・ジエネレーション的色彩の濃い世界を描きながら、後者では一転して芸術ボヘミアンたちの没時代的な生活を描き得た事実が、当時のフォークナーの精神的な彷徨を雄弁に物語っているのは、それぞれの作品に明確な主題が欠如している事実と共に、既に二つの作品論で触れた通りである(註1)。作家たらんとする興味や野望にもかかわらず、彼は、作家にとって最も必要である筈の主題をまったく持ってはおらず、その結果は、彼が若氣と模倣とによって僅かに独学した詩の作法で、観念的な散文を書くことでしかなかった。

だが、その彼がこの『サートリス』では主題を持ちしっかりと定着の基盤に立つ作家へと見事に成長しているのである。たしかにベイヤード三世やホレス・ベンボウの精神は明らかに『兵士の報酬』と同様ロスト・ジエネレーションの風土そのものの落し子だし、作法にも前二作に見られた詩的

構成と用語が頻出する。そしてこの作品の場合も、フォークナーは、そうしたロストの人物の内面生活を描き得ない（このことについては後で更に詳しく触れる）、という大きな欠点まで暴露している。しかも主人公がロストの人物である点で、この欠点は、この作品の価値を大きく損いかねないと言え言い得るのである。このような多くの、中には致命的とも思える欠点があり、芸術的には必ずしも成功した作品ではないにもかかわらず、これは、やはり主題を持ち定着の基盤に立つ作家の作品に違いない。

それは、彼が今後幾度も登場させる人物や場面、エピソードなどをこの作品ではじめて描き出した、などという表面的な理由によるものではなく、そうした表象的なものを含みながらも、更にそれを超えて、真に創作衝動をかきたてずにはおかない諸問題に漸く気づき、かつそのありかを探し当てた、という事実に依る。

そしてそのありかが、彼が生れ且つ育った「南部」であったのは、いうまでもない。既に幾度か触れたように、彼はいったん南部という極限の中に徹底的にもぐり込みその中に永続的な価値を確めることによって、やがて普遍へと向い、それをあの人間性不滅の信念へと結実させていった作家であった。自分が肌で知っている南部を、時には歴史を遡り、時には現在に立ちかえて、あらゆる角度から、極限の相を見極めようとした。ということは、彼自身を育んだ地であるということ深く愛し、同時に様々の悪を普遍化した点で憎んでもいた南部そのものだけを救済の対象にしたらっぼけな作家であった、ということの意味しない。彼がそれだけの作家であったなら、『アブサロム、アブサロム!』(*Absalom, Absalom!*)を書き終えると同時に、彼の創作意欲も燃え尽きた筈であり、最後の信念も遂に生れ出る筈はなかったであろう。しかし事實は、彼は、そうした極限の中に常に永続的で普遍的な価値をまさぐらずにはおられない真摯な作家であった。永続的で普遍的な価値は決して極限と離れた抽象の中にはあり得ない。そのことが、彼のあの精神的彷徨の最大の原因であったのを、他ならぬ彼

自身が一番よく知っていた筈である。つまり彼は、普遍的なものをまさぐる眼をもって、南部という極限を創作の場に設定したのだ、といえる。

だが、彼は、一体どのようにしてその創作の基盤に辿りついたのであったか、また、辿りついて最初に光を当てざるを得ないのはいかなる事柄であったのか、その結果『蚊』までに見せたあのロスト・ジェネレーション的な傾向はどのような影響を受けたのか、そして最後にそれらの事柄は、じっさいに作品の中でどのような形に纏め上げられているだろうか、などといった問題が次の課題になるだろう。この小論では、作品論のほかにかこうした種々の問題の考察をも同時に進めてみたい。(といっても、フォークナーは、自伝的な記録を残すことを極度に嫌った作家であった。大学その他でインタビューに答えたほかは、僅かに彼の家系について知られている事柄と書き残した作品が僕たちの利用し得るすべてである。結局はそうしたものから推論を下すことを余儀なくされるわけだが、しかし彼がどのようにして定着の基盤に辿りついたのか、という問題は、フォークナー研究にあって極めて重要な事柄に属するので、僕はこの小論で敢て試みてみたい。)

II

そこで先ずフォークナーが認識した南部がどのような世界であったか、という問題を見極めることから始めなければならない。

読者は劈頭から、南部という世界が既に死んでしまっているサートリス大佐の大きな影の下に生きている世界であることを知らされる。

彼 [=サートリス大佐] は、時間からも肉体からも自由であったが、互いの聞えない耳にある間隔ごとに喚きながら坐っているこの二人の老人 [=サートリス大佐の子ベイヤード二世とその友人フォールズ] のど

ちらよりも、遙かに実存的な存在だった(注2)。

このサートリス大佐が、じっさいにフォークナー自身の曾祖父カスパー・フォークナー大佐 (Cuthbert Falkner) をモデルにしているのは、既に言い古された事実だし、フォークナー自身が、たとえば『大学でのフォークナー』(*Faulkner in the University*) で、サートリス大佐創造にあたってどの程度フォークナー大佐を模したのか、という質問に答えて、かなりの程度作家自身の想像の所産であるとはいいつつも、「子供時代の私たちが成長する頃一緒にいた敗北を認めようとしないう未婚の老伯母たちから聞かされていた家族の年代記から、どのくらい私が利用したかは、私自身ページを追ってよく見なければ判りません。(注3)」と言って、このことを明確に認めているのである。フォークナー大佐こそは、爾後あれほどの強烈さで創作衝動をかき立てずにはおこななかった定着の基盤へと作家フォークナーを導いた人物であった、と僕は考えているが、このことについては後でもう少しつけ加えたい。

さて、フォークナー大佐は、『メンフィスの白いばら』(*The White Rose of Memphis*) を書くほどのロマンチストであるかと思えば、南北戦争が勃発するや義勇軍を組織して戦線に赴くたくましい軍人であり、リプレー鉄道、シップ・アイランド鉄道、ケンタッキー鉄道を敷設し、千二百エーカーの農園と百人の小作人と、その他に製粉工場、綿花工場、木工場などを所有する事業家でもあったし、ストーン・ウォール大学を創立する教育者かと思えば、南部を荒廃から救おうと東奔西走する政治家でもあった。そして彼の遺徳は時の推移と共に益々大きなものになっていった。現実の零落が起っていない場合ですら過去の栄光を大きなものにしていくのは人間の一般的な傾向である。ましてフォークナーの父親は精々曾祖父の敷設した鉄道の車掌か、ニュー・オルバニーという作家生誕の地の小さな駅の駅長か、ミシシッピー大学の事務員でしかなかった事実から判断されるよう

に、現実の零落がひどくなればなるほど、現存の家族は一層過去の栄光にしがみついていた。そしてやがてフォークナー大佐は、伝説化され神格化されていった。いったん神格化された大佐の影は、現存の人間に一層大きな、得体の知れない力を発揮していくのである。フォークナー大佐が作家を取り囲む環境の中で、なおどれほど大きな存在であったかを、たとえばロバート・キャントウェルは、次のように伝えている。

「フォークナー大佐が殺された時の模様を話すのは、日常の取りとめもない会話で口にする話題ではなかった。それは、その辺では未だ極く微妙な問題であった。フォークナー大佐は、作家フォークナーが偉大な小説類を書いていた頃には未だリプリー周辺の人々にとって、実と同じであった。人々は、彼が未だ生きていて、今はどこかの丘の上に行っているがいつ下りて来るか判らない、といった口調で彼のことを話していた。時代が下り一九三八年になって、私がリプリーでフォークナー大佐について尋ねた時でさえ、『サートリス』の冒頭で大佐の生涯と死がまき起した強烈な感情に呼び覚まれて部屋に亡霊が出るが、そこに述べられているのと同じ気持を人々が持っているのを、私は感じたのである(注4)。」

このようにフォークナー大佐が実在のリプリーの町の人々にとって大きな存在であったと同様、この作品の世界におけるサートリス大佐の影は大きい。そしてそれは益々大きくなり、現実の人物を惨めにし、そのある者を亡ぼしていく。フォークナー自身はその効果を意識的に計算したものかどうかは必ずしも判然としないが、結果的にはサートリス大佐は、「南部の過去の栄光」を具象化した象徴に高められている。その栄光が様々な悪と罪と悪行によって支えられたものであろうと、栄光に変わりはない。そしてもちろんこの作品には、そうした悪や罪、悪行などを摘発、糾弾し、それらを正す道をまさぐろうともがく作家の姿はない。こうした仕事こそは、

南部の縮図であるヨクナパトウファ郡という定着の基盤に腰を据えて以後の、フォークナーの主要な仕事であったからだ。この作品には、当時の流行に影響されて一見ロスト・ジェネレーション風の『兵士の報酬』で誤った作家的スタートをしたフォークナーが、長い模索の後で、彼自身もっともよく知っている曾祖父の姿を書いてみようと思いついた瞬間にその曾祖父の背後に広大な広がり長い歴史とを持った「南部」が見えはじめて、漸く主題のありかを明確につかみかけた作家の姿があるばかりである。従って僕たちは、この作品では、単に長い歴史と伝統を持った広大な南部を背景として考えればよい。サートルズ大佐は、その長い歴史と伝統の象徴であると考えればよい。この象徴は、この作品では、善として見られているのでもまた悪と考えられているのでもないから、単に「歴史の重み」と考えればよい。それは、南部という極限の世界が持つ特異な歴史の重みに違いないが……。 (フォークナーには実戦に参加した経験も皆無に等しく、生と死とが交錯する戦線で虚無感も喪失感も肌で感じる事がなかった点で、彼は厳密な(あるいは狭い)意味でのロスト・ジェネレーションの作家ではなかった、と僕は考えるが、このことについては既に他の機会に触れた(注5)。

フォークナー大佐のお蔭で定着の場に漸く辿りつくことができたフォークナーは、しかしまだ完全にロスト・ジェネレーションの影響を脱することができなかった。流行の衰えが未だ見られなかった為か、あるいは『兵士の報酬』でロスト的なスタートを切ったことに対する作家的道義心によるものか、それとも『兵士の報酬』で逆にロストの雰囲気作家的興味を抱いたためなのか、その辺のところはまったく判らないが、とに角この作品ではフォークナーがロスト・ジェネレーションに何らかの興味を抱いていたのは明らかである。

今僕が言っているのは、もちろん、第一次大戦から帰還したベイヤード三世や『サンクチュアリ』(Sanctuary)で活躍するホレス・ベンボウなどの

主要人物のことである。出征前と完全に同じである筈の南部に、彼等は精神の安住の場所を失っている。これは明らかに彼等が完全にロストの人物に変えられてしまった結果に違いない。彼等には一体何が起ったというのだろうか。また帰郷後の彼等には何が起り続けるのだろうか。そのことは特異な南部の歴史とどのように関係しあっているというのか。こうした問題を考える過程の中で、フォークナーがロスト・ジェネレーションの影響から抜け出て南部という主題を見出すのであるから、少しく丁寧に考察する必要がある。この考察は、前二作を蔽っていたロスト的な傾向がどのようにヨクナパトウファと融合統一されるのか、また同時にこの作品の主題が何であるかも、おのずと浮び上らせるであろう。

先ず主人公のベイヤードに的をしぼって考えてみる。

彼は、第一章で生れ故郷に帰還して来る。しかしヴェテランとして堂々と帰還して来る代りに、誰にも告げず、こっそりと、夕闇がおりてから漸く吾家の敷居をまたぐのである。彼は、その直前に、一緒に参戦して戦死した彼と双子のジョン (John or Johnny) の墓を拝んでいるのである。彼は、強い罪悪感と喪失感とにうちひしがれ、完全に自己を見失っている。

だが、この罪悪感と喪失感がどのようにしてベイヤードの心を侵すに至ったのかについての明確な言及はないし、また読者は彼の心の内部を窺く機会を与えられないから、彼の心理構造は判らない。読者は、あばれ馬から落ち、自動車事故であれば骨を折り、遂には飛行テストで自分の命を投げうってまでも、懸命にもがくベイヤードを見るばかりである。読者は、そうした彼の行動の裏に激しい悩みがあり、それが何に結果するものであるかを双子の兄弟の戦死や伝統的な南部という背景を考慮して、充分に想像することはできるが、それはどこまでも読者の想像でしかない。彼のそうした過激な行動が、自己の存在を再確認しようとする懸命なものがきの結果であるのはいうまでもないが、そのことも読者はさきの想像を働かすことによってはじめて理解するのである。つまり、ベイヤードの内部に立っ

ての言及はほとんどないのである。彼は、最初から罪悪感と喪失感を持ち、かつ持ち続けなければならない男として創造されている。後のフォークナーが得意の手法として多用した、あの内的独白や意識の流れ的手法は、ベイヤードにはほとんど用いられていない。

フォークナーがこのように内部をほとんど描かなかつたのは、この作品の最大の弱点になっている。なぜなら、彼がもっとも強く願っていた筈の、ロスト的な苦悩と南部の伝統の重みとの架橋は、その両者をもっとも強烈に受けているベイヤードの心の中を除いて、ほかに起り得る場所がないからである。しかしこの弱点の原因は、根本的にはフォークナー自身がロスト・ジェネレーションの作家でなかつたことにある。『兵士の報酬』ではマホンの内面を記憶喪失という手法で完全にとざすことにより、ロスト・ジェネレーション的気分を理解し得ない自分の弱点をカバーしようとしたが、大体それに近いことが『サートルリス』の場合にも起っているのである。自分がロストの気分を描けない弱点を、しかしフォークナーは恐らく誰よりもはっきりと感じていたに違いない。そこで彼は、この弱点を少しでも補強しようとした。ジョンが戦死したことに対する罪の意識と責任感とをベイヤードに重く荷わせたのには、そのような彼の意図があつた筈だと思う。

こうした人間的な苦悩に対するフォークナーの分析やアプローチの仕方は説得力があり、しかも確実である。ロスト的雰囲気をも十分に描き切れぬ弱点を補強するには、こうした苦悩を持ち出すのが、彼の資質からみて当然なことであつた。つまりフォークナーは、常に個の救済に限りない興味を抱きつづけた作家にもかかわらず、ベイヤードの内面を遂に十分に描くことができなかつたのである。あらゆる意味でこの作品の主題を荷い得る条件を備えた人物でありながら、フォークナーは遂にこの人物を生かし切れなかつたのである。とすれば、読者は、作品の主題を、この罪悪感と喪失感に悩むベイヤードと伝統的な南部社会との関係の上に移行して考え

ねばならないことになるのである。

そこでベイヤードが抱く罪悪感についてももう少し深く考察を進めておく必要がある。そもそもこれは何によるどのような罪悪感であるというのか。

ベイヤードの苦悩は先ず彼と双子のジョンの戦死によって始まった。同じ航空隊に属していた二人は、同じように、敵の来襲に飛び立っていったのだが、勇敢なジョンはベイヤードの止めるのもきかずに多数の敵機の中に飛び込んで行き、遂に撃墜されたのであった。ベイヤードの苦悩の原因は、弟の死に対する哀惜の念だけではない。彼は、同じ場所にいながら弟を制止させることができなかつたことで弟の死を自分の責任と考えると同時に、弟がサートリス家の者らしく勇敢に、微笑さえ浮べて敵機に突撃していったのに反して、ベイヤードは卑怯にもおびえてしまったという、自分の弱さに対する強烈な恥らいと自己嫌悪とにさいなまれるのである。彼は、サートリスの者らしく勇ましく死んだジョンに羨望をすら感じるのである。彼自身は、神格化されたあの偉大なサートリス大佐の足元にも及ばない……。

こうした哀惜、自責、恥らい、自己嫌悪といった感情は、複雑に絡みあってベイヤードの心に癒し難い罪悪感を形成していく。これらの絡みあった感情は、時と場所とに応じて、それぞれの鎌首をもたげてベイヤードを休むことなく苦しめるのである。だから彼は、夕闇にまぎれて吾家に辿りついた時も、開口一番「あんなにちっほけなぼろ飛行機に彼を乗せまいと頑張ったんだ」(注6)と荒々しく祖父ベイヤード二世に告白しなければならなかったのだし、一人きりになると、彼はいつも「お前がやったんだ」(注7)という良心のうずきを感じなければならないのである。

だが考えてみれば、彼は、サートリス家の、いや南部そのものの過去によって打ちひしがれた、何と悲惨な犠牲者なのだろうか。彼が抱く罪悪感はその殆んどが南部そのものの歴史や生活規範にその源を持っている。彼はあの栄光に彩られた南部の象徴的存在であったサートリス大佐の子孫なの

である。彼は、もちろん幼い日から、曾祖父の華麗な一生を繰返し聞かされてきた。話が繰返される度に曾祖父の一生が益々大げさで完璧なものになっていったことに気づく筈もないベイヤードは、いつしか、自分が生きていくべき基準をこうした肥大化された過去の人物の生き方から、作り上げてしまったのだ。自分は、栄光の人サートリス大佐の後裔なのだ。彼の栄光にふさわしい生き方をするのが自分自身の責任であり、同時に社会的責任でもある。そして彼の血を受け継いでいる自分にはきっとそれができる筈である……と。

だが、彼が、戦線で発見したものは、そうした崇高な理想には及びもつかない、ちっぽけで臆病な自分自身でしかなかった。敵機を見て平然としていられたのは、自分ではなくて、ジョンであった。彼自身は、他の兵士どもと同じように、特別な武勳もたてられない平凡な一兵士でしかなかった。戦争は、彼にサートリス家の偉大さを発揮させる機会になる代りに、理想と現実との大きな落差を意識させる契機になった。

この理想と現実との大きな亀裂がベイヤードを徹底的な喪失の人間に変えてしまう原因となったのは、既に述べた通りである。彼は、南部の歴史と、その象徴的存在であったサートリス大佐とから自ら作った「理想」によって、自己を見失った人物になったのである。つまり、彼は、南部の歴史のいたましい犠牲者なのだ。たとえばヘミングウェイの人物が、戦争そのものによって、喪失感、虚無感を持つに至ったのとは、根本的に違うのである。(しかし、当時のフォークナーは、戦争そのものによって失われたヘミングウェイ的な人物を描けないことに、一種の恥らいにも似た気持を抱いていたのではなからうか。彼は南部の伝統とは深い係わりを持たないホレス・ベンボウを、そうした失われた人物として描こうと最初は意図していたように思える。『サートリス』の最初の原稿では、ホレスはもっと前面に押し出されて、主要な人物として描かれているのである(注8)。そのホレスが実際の『サートリス』でかなり傍役的存在にされているのは、

この作品を書く途中で漸く「南部」という主題を見つけたフォークナーが、恐らく、この人物を大きく扱う必要を認めなくなったためであろう。また、こうしたロストの人物を、相変らず見事に描けない、という弱さを感じたせいもあったであろう。作者は、この場合にも、戦争のむなしさや恐ろしさを重くホレスに意識させる代りに、詩的想像力を与えるにすぎない。ホレスがロストの人間になったのは、まさに自己の想像力によってなのである。）

さて、南部そのものによって自己を見失ったベイヤードに、一体どのような救いの手が差しのべられたのであったろうか。しかしこれは殆ど愚問に近い。なぜなら、聞えない耳によって現実から遊離しいたずらにフォーールド老人 (Old man Falls) と過去を語り合うベイヤード二世に、孫のベイヤード三世の苦悩が判る筈はないし、ベイヤード二世によって代表される保守的な南部社会に三世の棲息の余地はないからだ。彼等は、現実が頽廃へと傾斜していけばいくほど、というより、現実の変化を容易に認めまいとして、過去の基準を益々頑なに守り通そうとするのである。そして最も悲劇的なのは、妻ナーシサ (Narcissa) まだが、そうした過去の魔力に捉われた、形式的で保守的な人物でしかない、ということである。彼女は、少しでも彼を理解し、慰めようとし、彼が怪我をすれば本を読んでやり、彼が狩猟に出かける時は一緒に行くのである。だが、ベイヤードの側に自分の苦悩を告白する勇気がなかったと同様に、彼女の側には、彼の心の内部へもぐり込む努力も才能もないのである。南部の形式に育まれた彼女は、遂に夫の苦しみの原因すら判らずに、いたずらにおろおろするばかりなのである。血みどろになって夫と共に苦しみ、救いの途をまさぐってやる、といった逞しさもない。それどころか、夫の心へ通ずる接点をすら彼女には見出せないのであった。

彼は唯一人で、他目には気違い沙汰に見える行動の中に、サートリス家の者である証を少なくとも自己に証明せざるを得ないのである。帰還後の彼の数々の行動は、すべてそのための空しい、しかし血みどろの努力であ

った。その努力の中で、彼は、祖父の死を早めた。元来心臓を病んでいた祖父は、孫ベイヤードの猛スピードで飛ばすフォードが溝に転落した時、発作を起して死んでしまうのである。祖父を殺したのが自分の責任だと感じたベイヤードには、罪悪感を拭い去る道はもはや完全に閉ざされてしまった。罪悪感を拭い同時に自己を再発見する道をまさぐっていた彼は、まさにその途中で、再び自己に決して許すことのできない殺人という大罪を犯してしまうからである。彼は、重い心を携えて、森の人マッカラム一家 (McCallum) を訪ねる。南部の形式や伝統に蝕まれることもなく、従って本来の人間らしさや同情心を豊かに持っている彼等の言葉も、しかし、深い罪悪感を抱くベイヤードには何らの救いにもならなかった。彼は、彼等の許を去って、さらに苦しまなければならなかった。罪悪感を拭い自己再発見の手懸りを求めて……。

III

以上述べてきたように、フォークナーは、ベイヤード三世を創造する過程で、見事にロストの世界から南部という定着の基盤に辿りつくことに成功した。純粋なロストの世界を知らないフォークナーであっただけに、ベイヤード三世のロストの状態から罪悪感へ至る経緯が必ずしも必然的に説明されていないのも、既に述べた通りであるが、しかしとに角、ベイヤードによってフォークナーが自分のよく知っている世界に主題を発見した事実は、大きな意義を持っている。この発見の瞬間にこそ、偉大な作家フォークナーの生誕があったといっても過言ではないからだ。フォークナーは、この作品を書く途中で「書くことの素晴らしさが判った。人間を二本足で立たせ、影を落させることができるのだから。こうした人物はみんな自分のものだと感じた。そう判ると彼等をみんな呼び返したくなった。」(註9)と言ったと伝えられているが、これはまさしく書くことに目的と興味とを持つに至った者の声だ。この言葉は彼にとって、ちょうどアルキメデスが金銀

の識別法を発見して絶叫した、あの「吾見つたり」の言葉と等しい価値を持つものに違いない。

そしてこの発見に決定的な役割を演じた外的要素の一つが、フォークナー大佐であった、と僕が考えているのも既に述べた。フォークナーは『サートリス』を書く前に、既に二つの作品を世に出していた。文学的名声を夢見ていたこの若い作家にとって、これら二作品が殆んど無視されたことに、少からず失望と焦躁を感じたことであろう。だが、恐らくそれ以上に彼の心に強くあったものは、主題もなく目的意識もなく書き続けることの「空しさ」であつたらう。いわば借り物の衣裳を着て書いたこれら二作品に目的意識は見られないのである（このことについてもそれぞれの作品論で触れた）。目的意識のない若い作家が文壇の流行に左右されたのは止むを得ないことであつたらうが、ロストの作風に振り回されていた自分を、フォークナーは、反省せずにはいられなかつたらう。そこで名声も得られず、同時に空しさを知った彼は、恐らく、幼い日から繰返し聞かされていた生れ故郷たる南部と、その中心的存在であつた（少くとも彼はそう聞かされていた）フォークナー大佐の話に、素直に作家的興味を抱ける状態になつていたことであろう。彼があゝ尋常一様な人物でないフォークナー大佐を中心にした話を繰返し聞かされていたのは、作家自身が幾度となく述べている。また「私は大祖父さんのような作家になりたい」と先生に言つたと伝えられる言葉が、彼が未だ小学校三年の時のものであつたとしても、この大佐を核とする南部の伝説がフォークナーに大きな印象を落していただろうということは、容易に想像つく。彼は、最初は幾分軽い気持で、むしろ自分の家の家系譜を綴るような感じで、この作品に手を染めていったのであつたらう。

つまり『サートリス』は、主題のない作品を書く「空しさ」とフォークナー大佐の存在そのものが作家フォークナーの心で結合した所産であつた、と僕は考える。大佐は、思わぬ遺産を曾孫にのこしたのである。

ところで、既に明らかなように、この作品のテーマは、ベイヤード三世の悲劇であり、その底を貫いて流れる主題は、現存の人間を破滅させずにはおかない「過去の魔力」である。フォークナーがサートリス大佐を描くにあたって、最初から象徴的意味を込めようとしたかどうかには疑問が残る（現在の研究段階では、むしろフォークナー大佐の伝説を作家的に処理する過程で、無意識的に、そして自然発生的に、象徴的存在になった、と考えている）が、この大佐の存在は実に鮮かな象徴に高められている。

この作品で南部という定着の基盤を持ったフォークナーは、たちまち、今迄考えてもみなかった数々の問題に取り囲まれるに至った。ベイヤードを押し潰さずにはおかなかった過去の魔力とは一体何なのか、それは何処に起因するのか、現存の個は、常に過去の魔力やそれを伝統という形で受け継いでいる社会の圧力に一方的に圧倒されてしまう弱い存在であるのか、個の中には、そうしたものを超越し、または改変する能力は潜んでいないのか、……等々の問題がたちどころにフォークナーの前に立ちはだかった。ここに至ってフォークナーは、完全に主題を持ち、目的意識を抱いた作家に生れ変わった、と言えるのだ。主題のない「空しさ」は完全に払拭され、その代りに苦しい、しかし同時に充実した追求の旅が始まった。こうしたせっぱつまった問題に一応の解決を与えるには、彼は、一九三六年の『アブサロム、アブサロム！』まで、懸命に書き続けなければならなかった。そして『サートリス』と殆んど時を同じくして、『響きと怒り』(*The Sound and the Fury*)で現存の人物の心理の根底にもぐり込むことにより、過去の魔力の正体をつきとめようとしたのは、今更いうまでもない。

(1968. 10. 15)

Notes

1. 『兵士の報酬』については立正女子大学英語英文科編『英米学研究』第四号(1967)に、また『蚊』については同女子大学『研究紀要』第九集(1965)に、それぞれ拙稿を掲載した。

2. *Sartoris: A Signet Book*, 1959. p. 27

Freed as he was of time and flesh, he was a far more palpable presence than either of the two old men who sat shouting periodically into one another's deafness...

3. *Faulkner in the University* ed. Gwynn & Blotner (Univ. of Virginia, 1959) p. 253-254

Question: ...How much did you draw on Colonel Falkner to get the picture of Colonel Sartoris?

Answer: ...I myself would have to stop and go page by page to see just how much I drew from family annals that I had listened to from these old undefeated spinster aunts that children of my time grew up with.

4. *Introduction* by Robert Cantwell to *Sartoris* published by Signet Books, 1959. p. XXII

The manner of Colonel Falkner's death was not a topic of casual conversation. It is still a delicate subject in the region. When William Faulkner was writing his great novels Colonel Falkner was still a living reality to people who lived around Ripley. They spoke of him, as if he were still alive, up in the hills somewhere, and might come in at any time. As late as 1938, when I asked about Colonel Falkner there, I encountered the sensation described in the opening sentences of *Sartoris*, that of a living presence in the room, summoned up by the intensity of feeling that the Colonel's life and death had aroused.

5. 立正女子大学英語英文科編『英米学研究』第四号拙稿参照。
6. *Sartoris: A Signet Book*, 1959. p. 59

“I tried to keep him from going up there on that goddam little popgun.”

7. *Ibid.*, p. 264

...: *You did it! You caused it all; you killed Johnny.*

8. Cleanth Brooks は、その著 *William Faulkner—The Yoknapatawpha Country* (Yale univ. Press, 1966) の中で、typescript の原稿と実際に本の体裁をとった『サートリス』との間には、書き換えがあったことを指摘した後で、ベンボウを描いた部分が大分削られた事実を伝えている(同書 106 頁)。また Michael Millgate は、*The Achievement of W. Faulkner* (A Random House Book, 1966) の中で、次のように云っている(同書 p. 82)。

Most of the changes involve Horace Benbow and his sister, Narcissa: as with *Sanctuary*, the earlier version of the novel was much more the story of the Benbows than was the version which finally appeared in print.

9. この言葉は何処で云われたものか不明だが、*Sartoris* (A Signet Book, 1959) につけられたイントロダクションで Robert Cantwell が次のように収録している(同書 p. VIII)。

He [=Faulkner] was halfway through *Sartoris* when suddenly “I discovered that writing was a mighty fine thing,” he said. “You could make people stand on their hind legs and cast a shadow. I felt that I had all these people, and as soon as I discovered it I wanted to bring them all back.”